

猿尾にまつわる少年の  
苦い悔恨が描かれる

## 猿尾〔高梁市〕

高梁川の猿尾（水制施設）遺構について

「猿尾」とは堤防から河川に向かって設けられた蒲鉾状の堤で、流れの勢いを落とし堤防を守る役割を担う。高梁市落合町近似地先、落合橋が架かる一級河川高梁川右岸にある「猿尾」は、築造時期は不明だが江戸時代の築造と想定できる。全長約80mの巻石堤で平成の修復箇所の一部は切石積である。

参考：「高梁川の猿尾（水制施設）遺構について」高梁市教育委員会

高梁川の水運が隆盛を極めていた頃、川岸に舟を係留し、荷の積みおろしをするため、港でいえば波止場にあたるものが川沿いの村々に必ず作られていた。角錐型に切ったひとかかえ程の花崗岩を、大量にすき間なくきっちり組んで、よどみの中に細長く突き出していたので、その形状から「猿尾」と呼ばれた。



高梁市落合町近似地先（落合橋、一級河川高梁川右岸）



釣りで出会う魚と人間  
模様を描く

## 祇園用水 (岡山市)

河川敷の野球場にぶつかるあたりで、大きな空っぽの川が、東南の方へ向かっているのが、洪水時に、旭川放水路となる百間川である。それを通り過ぎて、平野が山肌に吸い込まれそうなあたりを目指す。やって来たその場所は、私の記憶通りに今日も釣り人で溢れている。ここの用水路の樋門はひどく長いトンネルになっていて、その上にある土手から一目で辺りが見渡せる。樋門をすり抜けた流れは、泉のごとく水面にせりあがるように次々とわき上がり、さらにその流れを中心として、左右にゆったりと大きく、くるりと渦巻く流れができていく。まるで大きな池のような場所。くるりと渦巻いているから、くるり用水。

岡山市街地から約4km北に祇園大樋があり、古田用水と新田用水に分かれ、さらに分水を繰り返して旭川左岸を潤している。この物語の舞台となった池は、祇園大樋で分水後すぐの部分で、フナなどが多く生息しているようである。池の近くには江戸時代の大樋の仕組みを知る模型がある。

また、古代には少し離れた国府市場（岡山市中区）辺りにあった国府に都から国司が着任すると、国内の神社参拝をまとめて行うため備前総社宮が建てられた。この神社はこの池のすぐ近くにあり、江戸時代に池田綱政が造営していたが、焼失後、再建された。

参考：『岡山市の地名』岡山市地名研究会



祇園大樋



備前総社宮

江戸時代の大樋の  
仕組みを知る模型



備前焼職人である主人公の孝夫と喜八が葛藤しながら作った手榴弾

## 備前焼「手榴弾」〔備前市〕

太平洋戦争が始まると、武器に使う鉄などの金属物資が不足していたため金属類は値上がりし、全国各地の銅像や寺院の釣鐘や小学校のシンボル、二宮尊徳像なども供出させられた。そのうえ、鉄に似た堅牢な備前が陸軍の目にとまった。

戦時中、陸軍の参謀が備前にきて、窯元の組合に手榴弾の制作を命令した。当時一八軒あったという窯元は仕方なくみんなつくらされたが、軍に納められる前に終戦となってしまった。

陸軍がこの備前焼手榴弾の爆発性能の検査を小学校の校庭でした時、一間四方に囲った五分板を物凄い爆発力で打ち破り、水中検査では水煙を上げたそう。手榴弾はおおよそ四万個つくり、他に陸軍の使う水筒（真鍮に似た色だったという）や皿もつくらされた。

…「戦後、伊丹の弾薬庫で備前焼の手榴弾がみつけられて、そのために進駐軍が伊部を偵察することになった。それで、もしこの手榴弾がみつかったら『軍に協力した』ことになり、戦犯とみなされてしまうから、今度は隠せ」といわれた…

『やきもの魅せられて とことん備前』黒田草臣著 光芸出版より

「物原」という場所がある。焼物の産地では窯の近辺に失敗作や陶片を埋めたところをそう呼ぶ。この伊部でも昔大きな窯が数基あり、その近辺を掘れば多くの陶片を見つかることができる。陶片は昔の備前焼を知る大切な資料であり、今の陶工は皆それで勉強してきた。

「わしらは物原を作りようるんかのう。」

木箱の中身を穴に投じようとしたとき、喜八がそう言った。孝夫が無言でいると、

「物原じゃ。珍しい完品の物原じゃ。あとで掘り返した人がびっくりするわなあ。」

喜八はそう自問自答した。



備前市伊部の町並み

そこで見せられたのは一枚の写真だった。外国製の手榴弾が一個だけ書き込んであった。白黒写真の下に、高さ二寸八分、径二寸四分だけ提灯のようである。ちよど大人が片手でつかめる大きさだ。これと同じものを焼物で三百個作れという縦横数本の溝が刻んである。



主人公富士男が働いていた鉱山  
鉱山の町で過ごした子ども時代  
を描く

# 吉岡鉱山・遺構

〔高梁市成羽町〕

吉岡鉱山は住友と三菱の財閥形成、ベンガラ産業に大きく貢献しました。大同2年(807)銀山として始まり、応永10年(1403)ごろ銅山になったといわれていますが、戦国時代以前の歴史は謎のままです。石見銀山ともつながりのある鉱山ですが、鉱山名には変遷の歴史があり「吉岡」にも諸説があります。三菱商会は明治6年(1873)、吹屋小学校付近で操業を始め同26年(1893)、坂本に主要施設を移しました。岡山県最初の水力発電所を建てたのも吉岡鉱山です。笹畝坑道は見学施設として公開されていますが、坂本には坑道や選鉱場跡、トロッコを通すための拱渠、煙道、鉱滓煉瓦で造られたシックナーや沈殿池などの遺構があります。

解説 小西 伸彦氏

「硬い水」より(第十二回)

広場周辺の立ち入りは危険だからと学校で禁止されていたが、私たちは  
しばしばそこへ登った。欠けたら、赤レンガや煙道であつたり、  
ネルとか、円形の貯水場が粘土が天気具合によつて、周囲には半壊した  
広いド池があり、灰色の廃土を流した跡。その斜面が、割れたり、底なし沼に  
変貌する。黄土色の山肌は、溝が深く、幾本も刻まれたため、駱駝の吹きよ  
ように見える。私たちは、雨水で、月光、深き、幾本も刻まれたため、駱駝の  
塵が舞えば、私たちは、雨水で、月光、深き、幾本も刻まれたため、駱駝の



鉱滓煉瓦で造られた沈殿池(右)とシックナー



選鉱場



貯水場

写真提供 小西 伸彦氏

「震える水」より(第十回)

山が婚に入った先は、川上郡成羽町坂本(旧吹屋町)、ここには古くからの銅  
山があつた。……  
よくよく鉱夫の仕事をするように、ここでも鉱夫として働き始めた。富士男は、  
村の男たちがするようになり、ここでも鉱夫として働き始めた。富士男は、  
一級鉱夫として、給金も割高な額をもらえた。